



農村生活のすすめ

第10回：「都市・農山漁村交流」についてのすこし長いコラム（対馬編）

主席研究員 川井 真

目次

- | | |
|-----------------------------|----------------|
| 1. はじめに～対馬との交流 | 3. 東京の中心で対馬を語る |
| 2. 島の未来を語り合うコミュニケーション空間をつくる | 4. おわりに |

1. はじめに～対馬との交流

昨年からはほぼ毎月のように、長崎県対馬市を訪問している。対馬市は長崎県を構成する基礎自治体のひとつであるが、地政学的かつ歴史学的な見地から眺めれば、そこは神話の時代から現代に至るまで、しなやかに自主独立的な歩みを続けてきた希有な場所である。

『共済総研レポート』139号の「対馬における「しまづくり」についてのすこし長いコラム」でもご紹介したとおり、対馬は九州の最北部に位置し、九州本土からは対馬海峡をはさんで約132km、一方、韓国釜山までは朝鮮海峡をはさんで約49.5kmという地点にあり、まさに玄界灘に浮かぶ国境の島である。島は浅茅湾を境に上島と下島に分かれ、東西の幅が約18kmであるのに対し北端から南端までの距離は約82kmと、その形状は細長く、内陸は険しい山々が連なる地形であるため島内の移動は困難を要する。島の面積は無人の小島もあわせると約708km²あり、意外にも東京23区の面積よりも広い。しかし人口は32,519人（平成27年12月末現在）と東京都区部人口の0.4%にも満たない。平成27年時点での全島の高齢化率は35.2%であり、高齢者数は向後20年ほどは1万人前後で安定的に推移するものと思わ

れる。しかしながら、65歳未満の人口は減少傾向にあるため、これに歯止めがかからなければ高齢化率を押し上げていくことになる（『対馬における地域包括ケアシステムのあり方検討委員会提言書』平成27年12月報告）。したがって対馬では、子育て世代を中心とする若年層の生活環境を整えることが、喫緊の課題となっている。

対馬訪問の目的は「島民の島民による島民のための永続的なしまづくり」の支援であり、その活動の拠点は対馬市役所である。対馬市しまづくり戦略本部の「しまづくり」政策を後方支援しながら、保健部や農林水産部、総合政策部や市民生活部などとも関係を深め、また島内の農林漁業関係者や病院・診療所の医療スタッフおよび社会福祉協議会や消防本部、ならびに地域おこし協力隊（島おこし協働隊）や地元NPOなどの関係者とも、対馬の「しまづくり」に関する意見交換や今後の具体的な取り組みに関する打ち合わせを続けている。信頼に基づく人的交流はネットワーク状に広がり、いまでは現地からも多くの方々が東京を訪れるようになった。一方、東京からも研究者や医師や実業家など多くの仲間たちがこの島へと向かい、ネットワークは密度

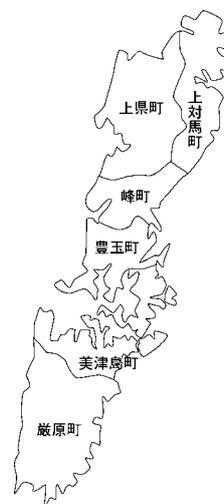
を増しながら、きわめて戦略的な「しまづくり」のための人的基盤が形成されつつある。

東京から対馬への移動は空路になるのだが、羽田空港からの直行便がないため福岡空港か長崎空港を経由して、そこから飛行機を乗り継いで対馬空港へと向かうことになる。福岡の博多港から対馬^{いづはら}厳原港行きのジェットfoil（高速船）も運行しているのだが、移動時間を考慮すると、どうしても空路を選択してしまう。また島内に入ってから移動手段にも課題がある。対馬は公共交通システムが非常に脆弱である。島内には鉄道が通っていないため、バスやタクシーを利用するか、あるいはレンタカーを借りる以外に移動の手段はない。わたしたちが訪問する際は、つねに対馬市しまづくり戦略本部の皆様のお世話になっている。この場を借りて日頃のご厚情に御礼と感謝の意をお伝えしたい。移動手段に関する課題は対馬の観光戦略とも密接に関係している。さらに、これからは高齢者ケアや認知症予防の観点からも検討していかねばならない重要なテーマである。しまづくり戦略本部の未来創造・交通政策課とは、対馬における新しい公共交通システムのあり方について、今後も検討を続けていきたいと思う。

2. 島の未来を語り合うコミュニケーション空間をつくる

対馬の「しまづくり」においてなによりも大切なのが、政治や経済、そして福祉政策の基盤となる地域環境の再構築である。対馬は四方を海に囲まれた離島であるが、島内には130を超える集落が存在し、これらが組み合わせられて対馬というひとつの生活文化圏としての「シマ」が形成されている。行政については、2004年3月1日に対馬市という広域な基

礎自治体が誕生したが、それまでは厳原町・美津島町・豊玉町・峰町・上^{かみあがた}県町・上対馬町の6町からなっていた。時代の要請によりコミュニティの規模もどんどん拡大していったのである。これにともない行政の中心地である厳原と——空港や基幹病院に近く、大型商業施設などへのアクセスも良い——経済の中心地となりつつある^{けち}雞知へと若年人口が移動したことで、島のなかでの人口の偏在が進展しつつある。すなわち中心市街地への人口の一極集中が、周辺地域の高齢化と産業の衰退を加速させる、という新たな問題を生み出そうとしている。しかし現在のところ、対馬の共同体機能は独特な方法で維持されている、といていい。たとえば行政サービスの一部を——旧町役場を市役所の分散拠点として——旧6町単位で行っていることや、対馬市消防本部と消防団による集落単位の生活支援、あるいは市政において重要な役割を担う市議会や市教育委員会をそれぞれ豊玉と峰に置くなど、行政機能の一極集中を回避しながら、暮らしに密着した行政のあり方を模索してきた。



長崎県対馬市（旧町名）

しかしながら、規模の拡大は経済・財政的な側面では有利に働くが、人間の意識や共同体の機能にマイナス影響を及ぼす場合も少なくない。自然と人間の協働により永続的な生活基盤をつくり上げてきた対馬という地域のレジリエンス、すなわち「しなやかな強さ」を、これからどのように維持していくのか、とても大事な局面に対馬は直面している。求められているのは世代や住居地などの枠組みを超えた未来への対話であろう。対馬全域の暮らしのあり様を鳥瞰しながら、島の未来を思い描き、島民のすべてが参加できるような対話空間をつくり上げることである。これは理想論を述べているのではなく、対馬という土地に息づく悠久の記憶が、それを可能にするだろう、という確信に基づく提案である。

たしかに島で生きる人々といっても、すべての人が、もしくはすべての組織・団体が、共通する信念を有しているわけではない。このようなデリケートな関係が、ときには市政に影響を及ぼし、イデオロギーや利害の対立を招き、組織・団体間の——小さな、しかし根の深い——対立構造などをつくり出してしまふことがある。したがって、もうすこし広角的かつ多角的な視座から理にかなった問いを発し、島全体の共有価値を誰もが自覚することで、小さな対立構造のしがらみを超克していくことが望まれる。対馬という地域共同体には、それを可能にするだけのエネルギーが埋蔵されている。

未来を構想し、それを具体的な取り組みへとつなげていくためには、たしかに、わたしたちは認識の正しさや真理性を明らかにして、それをわかりやすく提示し、ステークホルダーの理解もしくは地域全体の合意を得なければならない。しかしながら、認識の真理

性すなわち唯一無二で永遠不変の真理などというものが、そもそも存在するのだろうか。わたしたちの経験と知性が生み出した認識は、それ自体としては、かならずしも普遍的な定義を確立しているわけではない。それぞれの輪郭はぼやけ、境界はつねに重なり合っている。したがって、これらの認識に基づく信念が——それがたとえ対立の要素を孕むものであったとしても——具体的な活動への応用という文脈に組み込まれ、実用的で有用な道具として用いることができたならば、無益な対立構造に陥ることを回避できる可能性も見えてくる。

この文脈での真理とは、共同体の未来を描写する概念であり、可能なかぎり高度に調和のとれた安定的な未来を映し出す鏡である。拡散し、対立し合う信念も、生活の小宇宙すなわち小さな共同体のなかでは収束させることができる。共同体においては、そこに住まう人々のさまざまな信念が最終的には収束し、ひとつに統合されていくように運命づけられていると語ったのは、論理学者でプラグマティストのチャールズ・サンダース・パースである。大切なのは、わたしたちが採用すべき対話の形式を整えることであり、そして有意義な対話が続けることのできる環境と具体的なフレームワークを地域の内部につくり出すことではないだろうか。信念の対立はそのままに、もうすこし大きな視座からの協働を実現することは、共同体という場においては不可能なことではない。したがって論争により相手を論破したり、もしくはディベートを重ねて特定のテーゼの正しさを明らかにしたりすることに執着するのではなく、お互いの共通点を見出すこと、すなわち差異を強調するのではなく価値を共有することのほうが、より人間らしい合理的な営みといえるの

ではないか、そう考えるのである。

仮説をたて、テストを積み重ねていく知的探求という実験の論理は、状況を勘案しながら合理的な秩序を生み出し、それが信頼に値するものであるか否かを実験的に検証していくプロセスである。すなわち知的探究そのものが承認のプロセスでもあるのだから、したがってそれは共同体における未来創造のための論理として、さらには実践のための道具としても、有効に活用することのできる創造的手段なのだと思う。また知的探求は言うなれば実験のプロセスでもあるのだから、それは自然科学に限らず政治や文化や生活様式などを判断する人文社会科学の領域にも適用可能な——自然の真理を追究するための——実験的な態度にほかならない。

地域というローカルな共同体の内部で、社会の内なる人間が問題を提起し、意見を交換し、行動を起こし、それを実験によって検証していく知的探求の基盤こそが、いまの対馬にはなによりも必要なのではないだろうか。まさに島民の島民による島民のための「しまづくり」を実現するための、壮大なアクションリサーチであり、コミュニケーション・コミュニティの創造である。

3. 東京の中心で対馬を語る

島民の共有価値を探求するための機会は突然やってきた。去る2016年1月22日（金）から24日（日）までの3日間、「対馬じかん2016」と題するイベントが渋谷にあるシダックス本社ビルで開催された。このイベントは、シダックス・グループのコミッショナーである志太勤一氏のご厚意と組織的なご協力があったからこそ、実現することのできた企画である。事業を通じて健全・健康な社会（ソーシャル・ウェルネス）の実現を目指すという企業ビジ

ョン、「ソーシャル・ウェルネス・カンパニー」を掲げるシダックス・グループが、その活動の一環として、あるいは既存事業の枠組みを拡大して、対馬の「しまづくり」を陰から支援し、都市・農山漁村交流のひとつの舞台を演出したのである。思い起こせば、同グループによる東日本大震災後の被災地緊急支援活動も迅速だった。あらゆる経営資源を駆使して震災翌日には支援物資を現地に運び込み、被災者の悲しみの軽減と不安の解消に努めた。その活動はかたちを変えて現在も続けられている。ソーシャル・ウェルネスの実現を目指し、「社会問題解決型企業」という理念を掲げ、新たな経営モデルを展開する同グループの事業は、ある意味において産官民連携による地域創生の可能性を示したものであり、これこそがCSV (creating shared value : 共有価値創造) のひとつのモデルではないだろうか。今回のイベントも、年明けの休日を含む3日間、渋谷の本社ビルと隣接するレストランを対馬のために全面開放する、という大胆な決断によって実施された。



大漁旗に彩られた会場入口

22日（金）の午後には6階の会場で対馬市の財部能成市長とJAつしまの桐谷安博組合長が出席して記者会見が行われ、渋谷で対馬イベントを開催するに至った経緯と、対馬と



記者会見

いう国境の島の歴史や風土や自然環境などが紹介された。その後、各階の会場では手作りのイベント・スペースを設けて対馬の特産品販売や体験型の工芸教室が、そして最上階のホールでは映画上映やトークイベントなどが、3日間を通して行われた。ビル全体には対馬の空間へと導くインスタレーションが施され、慌ただしい東京の中心地に、ゆったりと流れていく「対馬じかん」が演出された。

1階のスペースには対馬の特産品「海の幸・山の幸」物産展が開設され、対馬の自然が育んだ原木自然栽培の乾しいたけや玄界灘の海の幸、絶滅に瀕するツシマヤマネコの保護活動を続ける佐護ヤマネコ稲作研究会が厳しい制約をみずからに課して大切に生産する「佐護ツシマヤマネコ米」など、対馬ならではの特産品が販売された。さらに店内には、



対馬の特産品「海の幸・山の幸」物産展

波静かな入り江で生産される対馬パールネックレスや、浅茅湾の海中から採石される希少な対馬天然砥石など、めずらしい対馬の特産物が数多く並んだ。

6階では、フロア全体を利用して「ツシマヤマネコ展」や「海洋保護区展」などの展示コーナーが設けられ、特設ブースでは数々の体験型イベント・ワークショップが行われた。

「命がめぐる 島ジビエ」のコーナーでは、地域おこし協力隊に参加して対馬に移り住んだ谷川ももこさんがパーソナリティを務め、害獣とされるシカやイノシシなどを使ったジビエ料理を食べながら、獣医師でありハンターでもある彼女の話に耳を傾け、そこから命の循環を感じとってもらいたい、という思いを込めたイベントが行われた。またワークショップというスタイルで開催されたのは、浅茅湾で育まれた対馬産真珠を使用して世界にひとつだけのアクセサリをデザインする「真珠加工体験」と、シカやイノシシの革を用いてヤマネコキーカバーを作成してみる「レザークラフト体験」であり、オリジナルの製品を自分で作成する体験型の企画である。この他に、佐護ヤマネコ稲作研究会の活



体験型イベント・ワークショップ

動報告や、ヤマネコ米おにぎりを試食できる佐護ツシマヤマネコ米の試食会なども開催された。

8階のホールでは、トークイベントや映画上映、そして対馬活性化ユニット「ずんだれ」のスペシャルライブなどが開催された。上映された映画『ふるさとがえり』については、作品のあらすじをここで語るわけにはいかないが、心の奥にしまいこんでしまった、なにか大切なものに、そっと触れられたような気持ちにさせられる、そんな作品ではないかと思う。上映後には脚本家の栗山宗大氏と「ずんだれ」も登壇して「都心でふるさとを語る、語り合う」というトークイベントが行われた。



映画『ふるさとがえり』

また林業の未来を考える「みどりの女神×林業女子～森林の未来を語る～」のコーナーでは、「2015年度ミス日本みどりの女神」の佐野加奈さんと林業女子会の方々が登壇して、森林とともに生き、自然のなかで働く、林業という生き方や働き方の魅力が、女性目線で語られた。

23日（土）の特別鼎談「対馬ダイバー～島に息づく土地の記憶を探る～」には筆者も登壇し、文化人類学者・思想家の中沢新一先生と、シンガー・エッセイストの相川七瀬さんとの3人で、対馬の魅力について語り合った。中沢新一先生は対馬におけるプロジェクトのパートナーであり、つねに情報交換をしている間柄であったが、相川七瀬さんについては、対馬の皆さまからお話しは何ってはいったものの、今回が初対面であった。この鼎談の目的は、対馬がどこにあり、どのような場所であるのかなど、対馬に関する情報や知識をまったく有していない来場者にも対馬の魅力をわかりやすく伝え、興味をもっていただくことにあった。しかし一方で、このテーマで語り合う鼎談の内容は対馬に住まう島民へのメッセージにもなる、と感じていた。島内におけ



「みどりの女神×林業女子～森林の未来を語る～」



特別鼎談「対馬ダイバー～島に息づく土地の記憶を探る～」(壇上左から筆者、相川氏、中沢氏)

る共有価値の創造は「対馬という土地に息づく悠久の記憶が、それを可能にする」と上述したとおり、この鼎談のテーマは対称性を帯びてくる。東京の中心で対馬を語ることは、対馬の「しまづくり」にとっても重要な意味があると、そう感じていたのである。

事前の打ち合わせで、鼎談は——現存するのは全国僅か3ヶ所となる——「赤米神事」の話題からスタートし、対馬という神話の島を北上するように旅をする、というストーリーで進めることにした。稲作伝来の地とされる対馬では、古代米の「赤米」を御神体とする神事が悠久のときを超えて現代へと受け継がれ、いまでも対馬西南端の豆酏^{まめこ}という地区の神田において、この儀礼に用いるためだけに「赤米」が栽培されている。しかしながら、土地の記憶を継承していくということは、とても難しいことでもある。とりわけ現代においては、市場における交換価値を求めないバナキュラーなものに時間と労力を費やすことの意味が、すっかり見失われてしまったように感じられるからである。日本社会のレジリエンス、すなわち日本人のもつ「しなやかな強さ」は、悠久のときを超えて受け継がれてきた「場所の記憶」と「経験」のなかで、再生産されているのではないだろうか。



特別鼎談・会場風景

あまり知られていないが、相川七瀬さんは農業と農にまつわる習俗や神道などにも造詣が深く、「赤米」の栽培と神事が継承されている長崎県対馬市、鹿児島県南種子町、岡山県総社市の「赤米大使」にも任命されている。未来に「赤米」をつないでいくことの意味を、たぶん重く受け止めているからなのであろう。昨年6月には3市町を結ぶ都市間交流事業「赤米サミット」が総社市で開催されたが、その席にも「赤米大使」として出席し、みずから田植えにも参加されている。神事や伝統文化のような純粹経験は、あらゆるものを“ムスビ”つけていく力をもっている。社会心理学者のウィリアム・ジェイムズは、なんの違和感もなくモノとモノ、ヒトとヒトの間をつなぎ、なんの不安もなくひとつの経験から他の経験へとわたしたちを運んでいってくれる、真理とはそのための道具であると述べたが、相川さんもまた、その土地に刻まれた「信じることそのものを信じる」というような態度に、何か大切なものを感じとっているのではないかと思う。東京の中心で対馬を語った約1時間の鼎談には、深いメッセージが込められることになった。

4. おわりに

都市と農山漁村あるいは農山漁村間での交流を深めていくためには、その前提として、それぞれの地域は閉じた存在であることが望ましい。閉じているからこそ世界に窓を開くことができる、ということを、渋谷で開催された「対馬じかん2016」というイベントが、あらためて気づかせてくれた。誤解のないように補足すると、閉じるというのは物理的な意味ではなく、それは地域に対する愛着や誇りであり、そこで生きる覚悟であり、その土地に息づく記憶を背負うという意味である。

そのためには、有意味な対話を続けることのできる環境を地域の内部につくり出し、誰もが共有することのできる——その地域固有の——価値のようなものを、対話の中心に据えていかなければならない。それはまさに、「たゆみのない対話を通した知の循環」という意味でのトートロジー（同語反復）といえよう。このような基盤を得た共同体は、たとえ一時的には高齢化や人口減少が進展しようとも、消滅したりはしないだろう。自主独立的な歩みが続けながらも外部にはネットワークを構成し、そこに新たな共有価値を創造して、しなやかに強く、流動的に生きることができるのである。そうすることで「地域力」と「人間力」も高まり、地域の暮らしの機能を安定的に発展させることができる。

たしかに日本はこれから、いまだ誰も経験したことのない超少子高齢人口減少時代へと突入していく。これは受け入れざるを得ない現実である。だからといって、経済の規模や、人間の数や、ましてや消費の縮小が、そのまま幸福感や安心感や生きがいなどの縮小につながると決めつけてしまうのは、あまりにも空虚であるし、短絡的過ぎるのではないだろうか。人間の数が減るということは、求められる役割が多様化してくるということであり、存在と個性が輝きはじめる時代になるという見方もできる。その意味においては、お互いの存在に感謝することのできる、総活躍社会の到来といってもいいのかもしれない。人間復興の時代である。

考えてみれば、そもそも人工知能が更なる進化を遂げたとき、いまの社会構造ではどれだけの人々が職を失うのだろうか。科学技術の進歩がかならずしも社会の幸福や福祉を向上させるわけではない、という事実は、すでに幾度となく経験してきたことではないだろ

うか。人間の復興に成功しないかぎりにおいて、近い将来には、この不安も現実のものとなるだろう。科学という限られた領域における知的探求と、人間の営みにおいて自然の真理を追究するための知的探求は、文明的進歩のための両輪ではあるが、両者は質を異にするものである。

さらに加えるならば、人間の数が減ってくると、人間以外のものたちの存在感が増してくる。植物や動物や、あるいは森や海が語りかけてくるようになる。対馬をたびたび訪問するようになってから、そのことを強く感じるのである。なにげなく言葉にしてきた「自然と人間の協働による永続的な地域づくり」の本当の意味を、対馬という場所で感じることができたような気がしている。対馬における「しまづくり」というプロジェクトは、まだ始まったばかりだ。

【参考文献】

- ・鶴見俊輔（著）（1986）『アメリカ哲学』講談社
- ・魚津邦夫（著）（2006）『プラグマティズムの思想』筑摩書房
- ・チャールズ・サンダース・パース（著）、伊藤邦武（訳）（2001）『連続性の哲学』岩波書店
- ・ウィリアム・ジェイムズ（著）、梶田啓三郎（訳）（1969・1970）『宗教的経験の諸相（上）（下）』岩波書店
- ・ミッシェル・セール（著）、及川馥・米山親能（共訳）（1994）『自然契約』法政大学出版局